2021年度 第2回JSR編集委員会　議事録

日時：2021年7月14日（水）18時
場所：オンライン（Zoom）会議
出席予定：長谷川 和宏（担当理事）、川口 善治（アドバイザー）、大島 寧（委員長）明田 浩司、石井 賢、鈴木 亨暢、竹内 大作、髙畑 雅彦、出村 諭、二階堂 琢也、福岡 宗良
欠席：今城 靖明、長谷 斉

陪席：事務局／鈴木　杏林舎／岡田、明松、小嶋

報告事項
1　日本低侵襲脊椎外科学会委員交代について
石井賢委員に交代となったことが報告された。

2　JSR投稿状況
一同査収した。
査読、論文掲載等の方針について
- 長谷川理事：英文誌への投稿が増えている中、二次出版という形で質の高い論文を和文でも掲載出来ることを学会通知(News Letter)でアピールしてみてはどうか。
- 鈴木委員：論文の質的にRejectを避けるのが困難なことがある。
- 髙畑委員：かなり論文に手を加えなければならないことがある。
- 長谷川理事：論文数が確保できるならば、レビュー前のRejectを増やし、査読の負担を減らせるのではないか。他学会に数編ずつ合わせて掲載することで、各号の掲載数をそろえてはどうか。
- 明田委員：両査読者がRejectの場合は不採用としているが、論文数を見て方向性を決めていただきたい。
- 川口アドバイザー：依頼論文であっても、論文として不採用の判断はするべきである。
- 長谷川理事：Invitation LetterにてRejectとなる可能性について触れているため、依頼論文でも論文の内容によっては不採用として良い。
- 鈴木委員：1人はReject、1人はMajor Revisionの場合に査読者を変えて対応したことがある。

- 長谷川理事：査読の最終結果について、査読者にも連絡が届くようにしたほうが良い。川口アドバイザーも賛同。
- 杏林舎 明松：S1M を使用している他雑誌で例があるため、最終結果の通知は可能と思われる。
- 川口アドバイザー：他学会の特集号に脊椎脊髄病学会の論文を 1、2 編載せ、数を均等にすることは可能か。
- 大島委員長：掲載する号を 1、2、5、9 号から変更するのはどうか。

<u>→各学会の特集号に脊椎脊髄病学会の論文を併せて掲載することは可能かどうか、フォーマットの違いを含め確認し、次回の審議事項とする。</u>

審議事項

1. 2023 年以降の学術集会の抄録アプリについて

2022 年より抄録集印刷がなくなり、アプリのみとなる。2022 年の JSSR は今年度と同様に大正製薬の好意で MICEnavi が提供されるが、2023 年以降は未定。そこで、①何社かに見積もりを取る、②JSR 委員会で審議の上、候補決定、③今年度中に理事会で決定、という流れの予定。現状では、以下の候補がある。

- 日整会で使用しているアプリ（大村印刷株式会社）
- 本学会で大正製薬から御提供頂いている MICEnavi(コングレ、MICE One)
- Kcon-navi(杏林舎)

- 石井委員：日整会は抄録集印刷に年間 1 億 3000 万円かかっていたところ、大村印刷による電子版・アプリ導入に 5000 万円（2021 年）、それ以降（2022 年以降）は 3500 万で維持できる予定である。コストや機能面も改善される予定である。今後、日整会に許可を得て、情報や JCS の情報を共有していきたいと思う。
- 長谷川理事：抄録集は論文と同じように記録に残るものであるため、JSR 委員会が担当する。関連学会の抄録集は従来通り、各関連学会の方針に従う。
- 鈴木委員：アプリを導入した場合、該当する号は消滅するのか。
- 長谷川理事：記録をアーカイブとし、号は従来通り消えない。
- 大島委員長：候補が多い場合は 3 社に絞ってプレゼンを行う予定である。

- 事務局 鈴木：2023 年からコンベンション会社がコングレから JCS へ変わる。今まではコングレであったため大正製薬の MICEnavi を使用していた部分もあるため、JCS の製品も候補に入れてみてはどうか。
- 川口アドバイザー：コンベンション会社は JCS とは限らず、大会長が決めるのか。
- 事務局 鈴木：2024 年の渡辺先生も JCS にされるご予定だが、大会長が決定する。コンベンション会社以外も広く検討した方が良い。

→抄録集アプリを提供している業者の情報を 8 月末までに寄せていただき、その中から 3 社程度に絞りプレゼンを行うこととなった。

2　本文内の見出し「結語」について

長谷先生より

原著 症例報告 テクニカルノート のいずれでも 和文要旨 英文要旨 には「結語」がありますが、本文の項目だけに「結語」がありません、これは正しい記述なのか、たまたま抜けているのかで、投稿論文の構造化のチェックが変わってきます。実際、本号の投稿原稿にも本文に「結語」があるものと、ないものもあります。またすでに発行された本年の JSR 原著号（1，2，5 号）を見ても結語の有無にバラツキがあります。執筆者、査読者にとっても今後のことも考えて明確にした方がいいのではないでしょうか。

- 杏林舎 明松：結語を追加する場合、投稿規定の修正が必要である。
- 川口アドバイザー：必ずしも本文と要旨をそろえる必要はない。
- 大島委員長：結語を載せる著者が多い印象がある。
- 長谷川理事：原著のみ結語を入れるのはどうか。
- →決をとった結果、現状維持で本文の見出しに「結語」は加えないという意見が優勢であった。長谷先生に確認して同意が得られれば現状維持とする方針とした。

次回編集委員会の開催について

開催日は未定（抄録アプリのプレゼンを秋口に開催予定）